

小学校英語活動とその周辺*

A Holistic Investigation of the EFL Educational Needs in the Elementary School Curriculum

中 村 典 生
Norio NAKAMURA

abstract

Since 2002, many elementary schools have implemented English instruction as part of the Global Understanding (Kokusai Rikai Kyoiku) curriculum. However, most elementary school teachers have had little experience in teaching English; therefore, there is some confusion over what they should do. The purpose of this study is to collect information through a questionnaire in order to better understanding what type of education children need before entering elementary school, and how the elementary school curriculum can be used to better prepare students for junior high school.

key words : 小学校英語活動, 国際理解教育, 早期英語教育

1. はじめに

平成14年度より, 新学習指導要領が發布されたことに伴い, 公立小学校で英語活動が実施されることとなった。しかし, この英語は教科としてではなく, あくまでも「総合的学習の時間」の中の「国際理解教育」の一環としての英語活動であり, 実施するか否か, また誰が何をどうやって指導をするのか, という問題は, 各小学校の裁量に任されているという状態である。このような状態なので, いまだに各小学校では少なからず試行錯誤が見られる。そこで本稿では, 今後の小学校英語活動のあり方を考える上で, まず現状を把握することが必要不可欠であると考え, アンケート調査を実施することにした。実施したアンケートの内容・対象は以下の通りである。

- (1) 小学生が知っている英語の語彙に関する調査
- (2) 小学校英語活動に関する全般的な調査
- (3) 中学英語指導者に対する小学校英語への意識調査
- (4) 幼稚園・保育園の英語活動に関する全般的な調査

このように, 本アンケートを小学校英語活動についてだけではなく, 幼稚園・保育園, 中学にまで広げたのは, 小学校に英語活動が導入されたことに伴い, その周辺でも何らかの変化が起きていることが予想されるからである。小学校ばかりではなく, その周辺の現状を把握することで, 全体的な動向を明らかにし, あるべき今後の方向性について考えることが本稿の目的である。

2. 小学生に対する語彙調査

本章で小学生に対して語彙調査を実施しようと考えた直接的きっかけは, 平成14年度に実施した実験授業の中で, 小学生が知っている語彙に偏りがあると感じられたからである。この実験授業では, (i) 身につけるもの・身体の部位と, (ii) 動物に関する語彙を導入した¹。しかし事前におこなった, 知っている語彙に関する調査では, 以下のように (i) (ii) の語彙間に非常に大きな差が出てしまったのである。(数字は20点満点中の平均点)

(i) 身につけるもの・身体の部位	(ii) 動物
2.4	9.0

『小学校英語活動実践の手引き』の中には, 日常生活に身近な語を導入すべきであることが述べられているが, 身近であるはずの (i) の導入率が非常に低いことがわかる。

そこで, どのような語彙がどこで導入されているかということ調査する目的で, アンケートを実施することにした。調査に協力していただいた児童は91名(1年生6名, 2年生10名, 3年生23名, 4年生14名, 5年生16名, 6年生22名)であった。アンケートでは, まず英単語を20のカテゴリーに分け, 1つのカテゴリーにつき4つずつ, 合計80個の語彙を選択する。語彙はアルファベットで提示すると読めない可能性がある²ので, 全て日本語で示し, (i) その日本語で書かれた語彙を英語でどう言うか知っているかどうか, (ii) 知っていればそれをどこで覚えたか(学校, 家, 塾の選択肢あり。複数回答可), を調べるという形式をとった²。調査したカテゴリー, 及び語彙は次の通

りである。

表 1

1	時（朝、夜、今日、明日）
2	職業（先生、医者、歌手、野球選手）
3	国（日本、中国、イギリス、アメリカ）
4	衣服（靴、ズボン、下着、靴下）
5	乗り物（車、電車、飛行機、船）
6	電気機器（テレビ、パソコン、電話、冷蔵庫）
7	天候（雪、雨、晴れ、曇り）
8	色（赤、青、黄、緑）
9	台所用品（茶碗、箸、スプーン、皿）
10	家にある場所（トイレ、お風呂、台所、居間）
11	身に付けるもの（時計、指輪、香水、眼鏡）
12	果物（りんご、イチゴ、メロン、みかん）
13	スポーツ（野球、水泳、スキー、スケート）
14	季節（春、夏、秋、冬）
15	野菜（人参、トマト、ジャガイモ、かぼちゃ）
16	建物（学校、家、病院、駅）
17	動物（犬、猫、兎、猿）
18	身体部位（目、口、手、鼻）
19	家族（父、母、姉妹、兄弟）
20	自然（海、山、空、森）

表 3 学年によるカテゴリー別語彙導入率の推移

	1	2	3	4	5	6
時	17%	16%	15%	17%	14%	28%
職業	14%	17%	14%	14%	24%	28%
国	19%	18%	21%	21%	23%	25%
衣服	22%	22%	20%	19%	17%	18%
乗り物	14%	33%	16%	19%	21%	29%
電気機器	17%	17%	14%	15%	19%	27%
天候	17%	43%	21%	36%	32%	39%
色	44%	64%	40%	40%	45%	42%
台所用品	14%	15%	9%	11%	8%	12%
家の場所	10%	19%	10%	14%	12%	14%
身につけるもの	14%	18%	12%	18%	15%	17%
果物	43%	58%	41%	43%	46%	48%
スポーツ	31%	28%	22%	27%	34%	31%
季節	7%	7%	8%	16%	21%	29%
野菜	36%	53%	33%	31%	38%	32%
建物	17%	20%	15%	19%	23%	30%
動物	61%	62%	36%	40%	38%	51%
身体部位	39%	52%	29%	42%	36%	43%
家族	17%	37%	24%	42%	38%	47%
自然	10%	15%	11%	20%	18%	19%

2.1 結果

アンケートの主な結果は以下の通りである。なお、表中の％はその語を知っている児童の割合を表している。

表 2 学年ごとにおける既知語平均値（％）

学年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	全体
平均（％）	23.1	30.6	20.5	25.9	26.3	30.4	26.1

学年ごとにおける既知語平均値

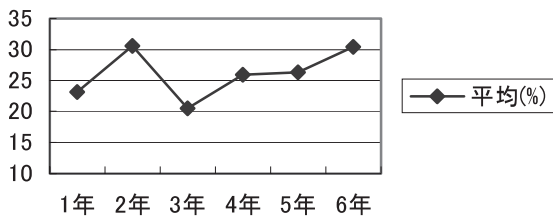


図 1

2.2 語彙調査に関する考察

2.1 節の結果から読み取れることは、低学年のうちからかなりの語が導入されているということである。予想では学年が上がるにしたがって、教わった語彙が蓄積されるので、たくさん語を知っているという形になると思われた。しかし(表 3)

表 4 学年ごとによるカテゴリー導入のランキング

順位	1年生（6名）	2年生（23名）	3年生（14名）
1	動物 61%	色 64%	果物 41%
2	色 44%	動物 62%	色 40%
3	果物 43%	果物 58%	動物 36%
4	身体部位 39%	野菜 53%	野菜 33%
5	野菜 36%	身体部位 52%	身体部位 29%
6	スポーツ 31%	天候 43%	家族 24%
7	衣服 22%	家族 37%	スポーツ 22%
8	国 19%	乗り物 33%	国 21%
9	時 17%	スポーツ 28%	天候 21%
10	電気機器 17%	衣服 22%	衣服 20%
11	天候 17%	建物 20%	乗り物 16%
12	建物 17%	家の場所 19%	時 15%
13	家族 17%	国 18%	建物 15%
14	職業 14%	身につけるもの 18%	職業 14%
15	乗り物 14%	職業 17%	電気機器 14%
16	台所用品 14%	電気機器 17%	身につけるもの 12%
17	身につけるもの 14%	時 16%	自然 11%
18	家の場所 10%	台所用品 15%	家の場所 10%
19	自然 10%	自然 15%	台所用品 9%
20	季節 7%	季節 7%	季節 8%

小学校英語活動とその周辺*

順位	4 年生（14名）		5 年生（16名）		6 年生（22名）	
1	果物	43%	果物	46%	動物	51%
2	身体の部位	42%	色	45%	果物	48%
3	家族	42%	野菜	38%	家族	47%
4	色	40%	動物	38%	身体の部位	43%
5	動物	40%	家族	38%	色	42%
6	天候	36%	身体の部位	36%	天候	39%
7	野菜	31%	スポーツ	34%	野菜	32%
8	スポーツ	27%	天候	32%	スポーツ	31%
9	国	21%	職業	24%	建物	30%
10	自然	20%	国	23%	乗り物	29%
11	衣服	19%	建物	23%	季節	29%
12	乗り物	19%	乗り物	21%	時	28%
13	建物	19%	季節	21%	職業	28%
14	身につけるもの	18%	電気機器	19%	電気機器	27%
15	時	17%	自然	18%	国	25%
16	季節	16%	衣服	17%	自然	19%
17	電気機器	15%	身につけるもの	15%	衣服	18%
18	職業	14%	時	14%	身につけるもの	17%
19	家の場所	14%	家の場所	12%	家の場所	14%
20	台所用品	11%	台所用品	8 %	台所用品	12%

表5 教わった場所ごとによる語彙導入率（％）

学校	塾	家
24.5	39.6	14.1

からわかるように、季節（7％→7％→8％→16％→21％→29％）や、職業（14％→17％→14％→14％→24％→28％）などのような、学年が上がるにしたがって知っている割合が高い、いわゆる積み重ねができていくカテゴリはむしろ稀で、逆に低学年の方がよく知っているというカテゴリ（衣服（22％→22％→20％→19％→17％→18％））、中弛みとでも言うような、中学年の知っている割合が低いカテゴリ（スポーツ（31％→28％→22％→27％→34％→31％）、動物（61％→62％→36％→40％→38％→51％））なども見受けられた。全体的に見ても中弛みの傾向は顕著であり、（図1）から特に3年生の落差が大きいことがわかる。これら特徴的なカテゴリの例をグラフ化したものが（図2）である（縦軸は％）。

これらの理由としては、平成14年度がまさに英語活動が導入された転換の年であるので、低学年も高学年も同じような語彙が導入されていたり、また、学校での配当時間数が少ない等の理由で、前に覚えた語をどんどん忘れてしまい、積み重ねができていないのではないかと、といった説明が考えられる。

また、どこでその英語を覚えたか、という学習の場所に関する調査結果より、今回調査した80個の語彙の中で、計算上、塾

表6 教わった場所ごとによる導入カテゴリのランキング

	学校	塾	家
1	動物（52％）	動物（59％）	果物（33％）
2	果物（51％）	身体の部位（58％）	色（30％）
3	色（48％）	家族（57％）	動物（24％）
4	身体の部位（46％）	色（55％）	野菜（22％）
5	野菜（36％）	果物（53％）	国（18％）
6	天候（35％）	スポーツ（51％）	衣服（15％）
7	家族（35％）	天候（50％）	家族（14％）
8	国（24％）	野菜（49％）	スポーツ（14％）
9	スポーツ（20％）	建物（39％）	乗り物（13％）
10	時（20％）	職業（37％）	電気機器（13％）
11	衣服（18％）	乗り物（37％）	身体の部位（12％）
12	職業（17％）	電気機器（34％）	建物（11％）
13	乗り物（16％）	自然（32％）	時（10％）
14	季節（16％）	衣服（28％）	職業（10％）
15	建物（15％）	季節（28％）	身につけるもの（9％）
16	身につけるもの（12％）	身につけるもの（26％）	天候（9％）
17	自然（10％）	時（26％）	家にある場所（9％）
18	電気機器（9％）	家にある場所（25％）	台所用品（6％）
19	台所用品（5％）	国（24％）	自然（6％）
20	家にある場所（4％）	台所用品（22％）	季節（5％）

表7 導入カテゴリ総合ランキング

	合計		合計
1	果物（46％）	11	職業（22％）
2	動物（45％）	12	建物（21％）
3	色（45％）	13	衣服（20％）
4	身体の部位（39％）	14	時（19％）
5	野菜（36％）	15	電気機器（19％）
6	家族（36％）	16	自然（16％）
7	天候（32％）	17	季節（16％）
8	スポーツ（28％）	18	身につけるもの（15％）
9	乗り物（22％）	19	家にある場所（13％）
10	国（22％）	20	台所用品（11％）

特徴的なカテゴリー

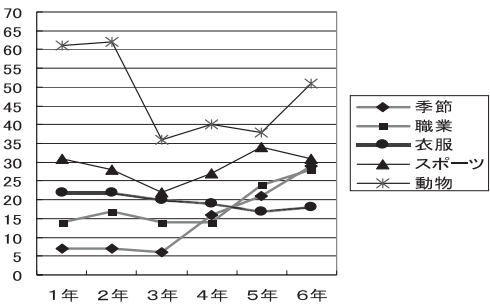


図2

は39.6%（約32個）、学校は24.5%（約20個）、家は14.1%（約11個）をカバーしているということがわかる（表5）。つまり、子どもたちが英語の語彙を多く学ぶ場所としては、まず塾、続いて学校、最後に家という順番であることがわかる。また、家庭での英語語彙導入率が塾、学校に比べ極端に低いという点も特筆すべきである。昨今家庭の教育力低下の問題がクローズアップされているが、今回調査した英語語彙の導入率の低さからも、その一端、特に塾への依存度が高いことが伺える。

先に示唆したように、さらに特徴的なこととして、日常生活に身近な語を導入すべきであるという『小学校英語活動実践の手引き』の考え方が実現されていないという傾向がある。特にその傾向は家庭に顕著であり、（表6）において、家で導入されている語のランキングの中で、家にある場所、台所用品のカテゴリーが20位中17・18位と最も低いランクの導入率であることがそれを表している。カテゴリー別総合ランキングで1位から3位までが、それぞれ果物、動物、色であることを考えても、全体的に見て、導入されているのは身近な語というよりも、扱いやすい語であるという印象である。極言すれば、英語が無理に作られた文脈の上で、指導者は「教え込み」、子どもは「勉強させられて」という傾向が出ており、身近な文脈に即して「提示され」「獲得されて」というわけではないと言える。たとえば学校で、家庭で、何らかの文脈に即して、「*Open your text book* (pause) 教科書を開いて」「*chopsticks* 持ってきて、お父さんのお箸」というような、その場その場で自然に英語の語彙を提示することが可能ならば、無理やり英語を教え込む必要はなくなり、習得率も上がるのではないかと考えられる³。

以上のように、語彙導入については、(i) 導入されるべき語彙の種類、(ii) 語彙導入される適正な場所とその方法、等の問題があることがわかる。しかし先にも述べたが、このような問題が生じた背景として、平成14年度が小学校英語活動元年という、過渡期であったという理由もあるように思われる。今回の調査に止まらず、更なる追跡調査の必要がありそうである。

3 小学校の英語指導者に対する調査

3.1 方法

英語活動について、現在の授業回数、指導者、活動内容、今後の活動等についてアンケート調査を実施する。行ったアンケートの内容は以下の通りである。

A.

1. あなたは何年生の英語を担当している方ですか？
2. 今年から、英語活動が導入されましたが、どのくらいの割合で英語活動が行われていますか？ 週・月 回
3. 1) 誰が英語活動の指導をしていますか？
a) 学級担任 b) 外国人教師 (ALT・AET)

- c) 日本人英語教師 d) 学級担任と外国人教師 (ALT・AET) e) 学級担任と日本人英語教師
f) 外国人教師 (ALT・AET) と日本人英語教師
g) その他 ()

2) 誰が教えるのに好ましいと思いますか？ (複数可)

3) 文字 (アルファベット) は使っていますか？

はい・いいえ

B.

1. 1) 学年ごとで、活動目標を作成されていますか？

はい・いいえ

2) はいと答えた方に聞きます。具体的にどのようなことを行っていますか？活動内容を大雑把に教えてください。(可能ならば活動計画のコピーを添付して頂ければ幸いです。)

3) 実際にやってみて、効果があると思われた活動があれば教えてください。

2. 小学校における英語活動で重要なことは何だと思いますか？ (複数回答可)

- a) 発話させること b) 読ませること c) 書かせること
d) 聞かせること e) 楽しませること
f) 国際理解 g) その他 ()

C.

1. 英語活動について自治体で小学校で英語活動を始めるにあたり、自治体で何らかの取り組みがありましたか？
(例：教師が英語を学ぶ講座等)

2. 1) 現在国際理解教育の一環として英語活動が行われていますが、今ある程度統一されたカリキュラムや教科書の必要性をお感じですか？ はい・いいえ

2) 1) のように答えた理由をお聞かせください。

3. 今年から、英語活動が導入されましたが、実際行ってみて生じた問題は何がありましたか？

4. 1) 小学校で今年から英語が総合的学習における国際理解教育の一環として活動を行っていますが、今後、英語が授業科目となる可能性が指摘されています。英語が科目となることは可能だと思いますか？

- a) 可能 b) 不可能 c) どちらとも言えない

2) 1) のように答えた理由をお聞かせください。

3) 英語が授業科目となるために今後必要と思われることをお聞かせください。

D.

1. 1) 中学校でこれまでやってきたことを、どの程度までこれから小学校でやるべきだと思いますか？ (できるだけ具体的にお願いします。)

2) 初めて学校で英語に触れる機会が中学校から小学校に早まったわけですが、これを契機に、中学校の英語教育

小学校英語活動とその周辺*

も変わるべきだという指摘もあります。これについてご意見を聞かせてください。

- a) 変わるべき b) 変わる必要はない c) どちらとも言えない
3) 2) のように答えた理由をお聞かせください。

3.2 調査対象

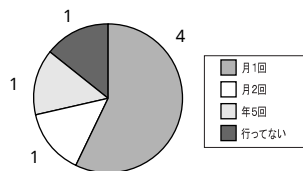
対象は岐阜県(4校), 愛知県(2校), 長野県(1校)で何らかの形で英語活動にかかわっている, あるいはかかわったことのある小学校の教員合計20名である。

3.3 結果

以下に主なアンケート結果を記す。

A. 2. どのくらいの割合で英語活動を行っているか

回数	学校数
月1回	4
月2回	1
年5回	1
行っていない	1

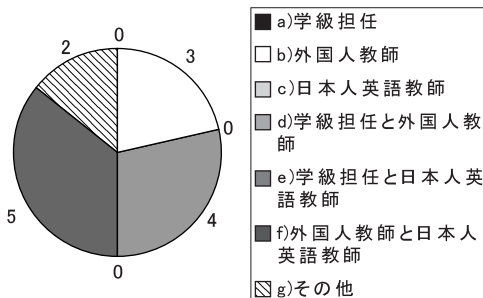


A. 3. 1) 誰が英語活動の指導をしているか

全員が(d)学級担任と外国人教師(ALT・AET)を選んだ。(d)に加え(g)その他で, 英語活動協力員, フリー教員という学校もあった。

A. 3. 2) 誰が教えるのに好ましいか

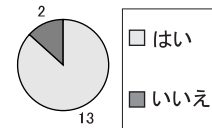
選択肢	人数
a) 学級担任	0
b) 外国人教師	3
c) 日本人英語教師	0
d) 学級担任と外国人教師	4
e) 学級担任と日本人英語教師	0
f) 外国人教師と日本人英語教師	5
g) その他	2



その他として, 専科出身者と熱意のある人という意見があげられた。

A. 3. 3) 文字は使っているか

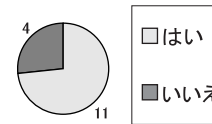
はい	13
いいえ	2



B.

B. 1. 1) 学年ごとに活動目標を作成しているか

はい	11
いいえ	4



B. 1. 2) 具体的にどのようなことを行っているか

- ・ゲームを中心として体を動かして遊ぶ。(バクダンゲーム, ハロウィンパーティー, 絵合わせゲーム, しっぽつけゲーム(詳細は不明)など)

- ・(町内で作成した)指導のための本

- ・歌, 発音(フラッシュカード), 簡単な英会話(あいさつ等)
- ・フォニックス

B. 1. 3) 実際にやってみて, 効果があったと思われる活動

- ・歌や会話など楽しみながら取り組む。
- ・ゲームを中心として体を動かして遊ぶ。
- ・ゲームを通して方位, 体の部位を学ぶ。
- ・フォニックスをやる。(毎回やっているため, 子供たちが発音を気にするようになった。)
- ・修学旅行先で外国人に話し掛ける活動。
- ・福笑い— eye, mouth, ear...(1, 2年)

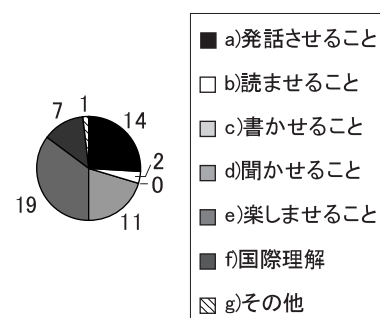
お店屋さん— How much? ○○yen(3, 4年)

道案内について— I would like to go ○○.

(5, 6年)

B. 2. 小学校における英語活動で重要なことは何だと思うか

a) 発話させること	14
b) 読ませること	2
c) 書かせること	0
d) 聞かせること	11
e) 楽しませること	19
f) 国際理解	7
g) その他	1

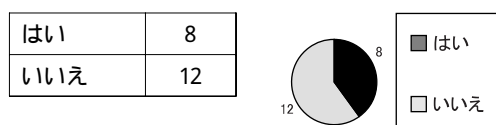


その他として、(a)～(f)全てを総合して行うことが重要だという意見もあげられた。

C. 1. 小学校で英語活動を始めるにあたり、自治体で何らかの取り組みがあったか

- ・担当教師の英語講座。
- ・各校2～3名参加の夏休み英語講座。
- ・外国人教師を採用。
- ・ALTとの授業進行についての打ち合わせと実技研修。
- ・教務主任会を中心にカリキュラム作製，ALTの割り振り等。

C. 2. 1) 今ある程度統一されたカリキュラムや教科書の必要性を感じているか



はいの理由

- ・中学校に入学後の生徒の英語習得状況を統一するため。
- ・最低限の基準はあった方がいい。
- ・教科書は必要ないが、カリキュラムがないと3～6年が段階をおってやっていけない。
- ・準備が大変。
- ・AETと学校の方で連絡を取り合いながら毎回打ち合わせをしているため。
- ・全国共通して必須のものは必要。
- ・ある程度の目安がほしい。(やる、やらないにあまり差があり、中学校での指導に影響するようになっては困る。)

いいえの理由

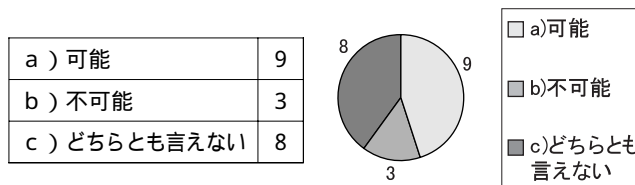
- ・ゲームで学習が進められるよさを大切にしたいから。
- ・英語に親しみ、外国の方と触れ合うことが大切。
- ・実態が一樣でない。
- ・小学校では必要ない。
- ・英語という世界に通用する言葉も大切ではあるが、まず母国語をしっかり学んでほしい。こんなものもあるのだと触れる機会は必要だ。
- ・楽しむ活動を創意工夫して行っていくことが必要。
- ・楽しみながら学んでほしいから。
- ・それぞれの実態に応じたものであればよい。

C. 3. 実際行ってみて生じた問題

- ・発音の難しさ。
- ・AETと担任などとの打ち合わせの時間の確保。(打ち合わせ不足だと授業中に止まってしまう。その場で何とかするというのがいつもできるわけではない。)
- ・回数が少ないので定着しない。
- ・一町一人のALTでは授業出張は困難。
- ・英語の専科の教員が必要。

- ・カリキュラムが難しい。
- ・学級担任が関わるのはなかなか難しい。
- ・教師自ら英語を話す場が少ないので、AETとのコミュニケーションが大変だった。

C. 4. 1) 今後、英語が授業科目となることは可能か



a) の理由

- ・国際化にむけて今後必要となるから。ただし、言語教育としてではなくあくまで国際理解教育の一環として行うことが条件。
- ・コミュニケーションの中で正しい発音を聞き取り発音するためには低年齢から始めるべき。
- ・中国など諸外国では行われているから。
- ・英語とITに総合的学習が絞られる。日本人の多くは英語が話せないのが実情。(話せる日本人が必要。)
- ・将来的にやっぱり必要だし、より若いうちにやるべきだから。
- ・総合的な学習の中で英語活動を行っているところが多いので文部科学省もこのような実態をふまえて、科目になっていくのでは。ただ、小学校でのねらいをしっかりと考えなくては行けない。
- ・総合の時間の中で国際理解を深める時間として取り組める。

b) の理由

- ・まずは母国語。日本語もまともに話せないのでは困る。

c) の理由

- ・時間数の問題。
- ・もっと大切なことがほかにすることがあるだろう。でも仕方なくやることになるかもしれない。
- ・カリキュラムとそれに順じたテキストがあれば可能かもしれない。
- ・週5日制の中で可能かどうか判断できない。
- ・今後、将来に必要なもの。
- ・中学で本格的に学ぶための素地づくりとしては可能な気がする。しかし、ここまでできたという評価ではなく楽しく発音したり、外国に興味を持つことが大事。

C. 4. 3) 英語が科目になるために今後必要だと思うこと

- ・指導者の育成と教員，外国人教師の増加。
- ・低学年のうちからAETとの交流を少しずつ積み重ねること。
- ・発達段階に応じたカリキュラムの開発。
- ・小免習得への必修科目となること。専科の免許＋小免一種の所有者の育成。

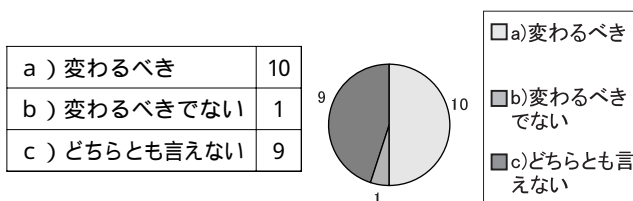
- ・教師の英語力。
- ・小学校でも専科が必要。正しいきれいな発音をさせたい。
- ・英語を学習するのに適した環境。(設備や指導者)
- ・時間数。(土曜も学校に来る, 何らかの教科の時数を減らす等)
- ・体験(ショートステイ, 交流会等)を子供の土日の活動に自治体, 国などが積極的に行い親や地域に知らしめていく。必要性を人々に感じさせなければならない。

D .

D . 1 . 1) どの程度これから小学校でやるべきか

- ・簡単な日常会話程度。よく使う単語。
- ・日常のあいさつ, 有名な歌。
- ・発音と会話のみ。
- ・生活を基盤とした会話。身近な会話。(生活に密着したもの。)
- ・中学校の英語教育とは別物と考え, 中学校でやっていることを小学校でやるのではなく小学校では聞かせることや楽しませる(ゲーム)ことなどをやればよい。
- ・単語のボキャブラリーを増やす。(小学校のうちの方が覚える。)
- ・外国の方と触れ合う。
- ・アルファベットを読めること。(例: A という綴りでも, エイ, ア, アー等発音がいろいろあり, 日本語とは違うんだと思わせる。)
- ・英語を楽しめる活動。(英語の短い物語を読む。)
- ・中学校でやってきた内容はこれまで通りでよい。勉強らしい勉強は小学校で行うと, 逆に英語嫌いになる可能性がある。

D . 1 . 2) 中学校の英語教育が変わるべきか



a) の理由

- ・高校入試の方式が変わらない限りは発展した方向へ向かうのは困難である。
- ・会話できる英語。コミュニケーションができること。
- ・話す力の育成が今後さらに重要視されていくと考える。
- ・書くこと, 文法より話すことを中心にすること。
- ・つながり, 価値の共通性が必要。
- ・実践的な使える英語力を身につけさせる指導を行う必要がある。
- ・どんどん使える英語にしてほしい。体で自然に覚えるもの。
- ・実用的に外国の方と対等に話をしていける力をつけるため, コミュニケーション的な時間を多く確保する必要がある。

- ・受験科目としてだけの英語は脱却したい。
- ・喋れる英語, 楽しい英語を教えてほしい。英語が楽しいと思わなければ子供たちは勉強しようと思わない。試験用の英語では社会の中でみんなが使えない。
- ・会話できる力をつけるカリキュラムが大切。

b) の理由

- ・現状で精一杯なのではないか。

c) の理由

- ・すでに変更になっている。
- ・何をねらいとして英語を学ばせるかをはっきりさせれば小学校, 中学校における英語とのかかわりの方向性は見出せるのではないか。
- ・英語嫌いをつくってはいけけないので, 小学校では楽しくやればよい。だから小学校に中学校でやっている内容をおろしてこなくてもよい。
- ・基本的な文法は必ず覚え, 身につけるべきでその後応用的な日常会話に入らせたいが, 時代のニーズでは中学校の英語が実用的になっていく感じがする。
- ・必要性がないから, 受験のためだけの知識にしかっていない。あえて変えていく必要はない。
- ・中学校が変わるならば, 小学校でのきちんとした教育課程を組むべきで今のような総合的な学習として位置付けだけではいけない。

3. 4 小学校教員に対するアンケートからの考察

A . 2 の英語活動の時間数に関する調査では, 多いところで月2回, 平均すると月に1回程度が英語活動に充てられているようである。全国的に見てもこの傾向があり, 平成14年末現在で, 学年差はあるものの, 全国平均では約平均50%強が英語活動を実施しており, その時間数は月1時間程度であるという。国際理解教育の一環としての英語活動であるし, 実施する, しないも学校裁量であるわけであるが, 実施率, 時間数ともに, まだまだ少ないという感否めない⁵。

A . 3 , 3) の文字は使っているか, という質問に対しては, 15人中13名(87%)が使っていると答えた。音声中心が謳われている小学校英語活動であり, またB . 2 の小学校英語活動で何を重視するかという問いに対しても, 発話すること, 聞かせることなどが重視されるべきだという結果が出ているが, それにもかかわらず, 実情としては少なからず文字に頼る傾向があるようである⁵。

B . 1 , 1) で学年ごとに目標を設定しているか, という質問に対しては, 15名中11名(73%)が設定していると答えた。具体的に立てられている目標は「簡単な挨拶ができる」や, 「英語を使って買い物ができる」等, 様々であるが, 目標を立てることは非常に難しいという意見が多数見られた。その理由とし

では、小学校英語活動自体の到達目標が設定しにくいことが挙げられる。到達目標は日本の英語教育全体の枠組みの中で捉え直し、その中で小学校における目標が決められるべきであると思われる。勿論、現在の小学校での英語活動は、教科ではなく、国際理解教育の一環としての英語活動、英会話であるので、現状はこれで良いという見方もある。しかし日本人の英語下手を克服するという期待が大きく、昨今の小中連携、中高連携、また幼小連携などの動きを見ても、小学校英語だけが日本の英語教育全体の構造付けから外される利点は見出しにくい。目標設定に関する議論は今後の大きな課題となるであろうし、早急に対処すべき問題であると考えられる。

C. 2, 1) 小学校英語活動にある程度統一されたカリキュラムや教科書の必要性を感じているか、という質問に対しては、20名中8名(40%)が必要であると答えたが、残りの12名(60%)は必要ないと答えた。統一されたカリキュラム作成の問題は、小学校英語の教科化(可能だと考える教師9名(45%))、さらには評価の問題と切り離して考えることはできない。Cの回答を検討してもわかるように、現状では、指導者の問題(外国人指導者の確保、指導者研修など)、目標論を踏まえたテキスト・教材作成の問題等がクリアできない限り、すぐに教科化、統一カリキュラムの作成といった方向性は打ち出せない。そういう意味で、統一カリキュラム賛成派である現場教師が、この割合であるということは当然であろう。ただこの中で、小学校英語の統一カリキュラムの作成、また教科化に反対であるという理由として、「英語教育より日本語(国語)教育の方を重視すべき」とであるという意見が根強いことには議論の余地がある。学校五日制、総合的学習の時間の導入により、基礎科目に充てられる授業時間が削減され、国語力低下に危機感が募っていることが、このような意見が出てくる直接の原因である。しかし、国語力低下の問題を、英語教育導入の問題のみと関連付けて議論することはナンセンスであるように思われる。そもそも小学校時期の児童は言語形成期の真只中にあり、自ら試行錯誤を繰り返しながら言語を習得していくことができる。英語を勉強したからと言って、日本語習得能力が低下するわけではなく、また二言語を学ぶことで多少の試行錯誤の頻度が増えたとしても、以降の軌道修正が全く可能である。むしろこの試行錯誤は言語形成期の特徴であり、危機の対象ではない。それよりも、国語力は国語の授業でしか身につかないと考え、英語に矛先を向ける方が的外れであるように思われる。ほとんどすべての授業は日本語を用いて行われるのであるから、細かな文法的な事項はさておき、表現力、理解力は国語以外の教科や総合学習の時間でも十分身につけることができるはずである。そういう意味では、現場教師の意識転換を図り、また、言語習得に関する知識を高めてもらう必要があると思われる。

また、D. 1, 2) の中学校英語が変わるべきか、という質

問に対し、変わるべきであるという答えは10名(50%)であり、変わるべきではないと答えた1名(5%)を大幅に上回った。この件も、日本の英語教育システム全体の見直しと切っても切り離せない問題であるが、特に問題視されるのはいつも受験の問題である。たとえ実践的コミュニケーション能力の育成がいくら叫ばれても、「受験制度が変わらない限り、教え方、教える内容を変えることはできない」、というのが彼らの主張である。さらに、中学校の先生は高校入試に責任を負わせ、高校の先生は大学入試に責任を負わせる傾向がある。詰まるところ、日本人の英語下手の元凶は、大学入試ということであろうか。

しかしこれもまた、その場凌ぎの的外れな中傷であるように思われる。来るべき全入時代を目前に、現在大学では急ピッチで入試制度改革が行われているし、また確かに、受験制度そのものは日本の英語教育システム全体の中で見直して行く必要があるが、実践的コミュニケーション能力が教養英語で身につかないと考えること自体に問題があるのではないか。本稿での趣旨と外れるので深く言及することは避けるが、教養英語を実践につなげて行くための工夫をして行くことこそが重要である。

本節では小学校英語活動に何らかの形で携わった経験のある先生を対象にアンケートを実施し、その結果から考察を加えてきた。その中で、小学校英語は独立したものではなく、日本の英語教育システム全体の中で目標を見据えていく必要が感じられた。以降では、小学校英語活動が導入されたことに伴い、その後を受ける中学校ではどのような変化があるのか、あるいはないのか、を探るためのアンケートを実施することとする。

4 中学校英語の指導者に対する調査

前節で述べたように、小学校に英語活動が導入されたことに対し、中学校英語の指導者はどう考え、どのように対処しているかということを調査することを目的として、アンケートを実施することとした。回答が得られたのは、岐阜県・愛知県の中学校7校の教員合計24名である。

4.1 アンケートの内容

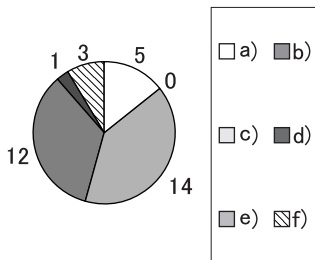
アンケートの内容は以下の通りである。

1. あなたは、何年生の英語を教えていらっしゃる方ですか。
年生
2. (1) どのくらいの割合で英語の授業が行われていますか。
週 回
- (2) 中学校では、何を重視して英語の授業を行っていますか。
順位をお書きください。
- a) 発話 b) 読み c) 書き d) 聞く
- e) 文法 f) その他

4. 来年、小学校で英語活動を経験した児童が中学校へ入学し

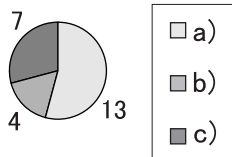
てくるが、それについてどう考えているか。

選択肢	人数
a) 英語の授業内容を変えていく必要がある	5
b) レベルを上げる必要がある	0
c) 小学校で学んだことを生かすような英語の授業をする必要がある	14
d) 具体的には分からないが変える必要がある	12
e) 今まで通り変えなくてよい	1
f) その他	3



4. f) その他の理由としては以下のようなものがあつた。
- ・何も変えなくてもよいとは思わないが、小学校で学んだことを生かしながらかやほり基礎から教える必要がある。
 - ・小学校で学んだことを生かすということを考えるのではなく、授業をしていく中で、「このフレーズ聞いたことがある」「あの歌の歌詞は、こういう意味だったんだ」というふうにならんに生かされてくると考える。
 - ・小学校では文字は導入せず、耳と口を使って英語活動をしているので、中学に入って文字に触れ理解が深まていくのが望ましい。
5. 今後、小学校で英語を科目として授業を行った方がいいか。

選択肢	人数
a) 行った方がいい	13
b) 行わない方がいい	4
c) どちらともいえない	7



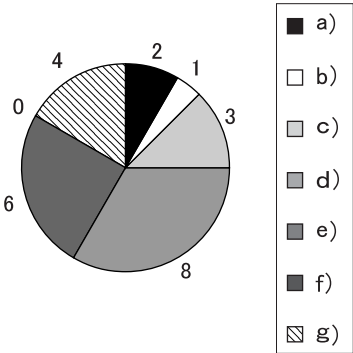
- a) の理由
- ・小学校4年生から英語を科目として導入し、中学校3年生までの6年間で英語の基礎を身に付けらせるようにした方が、効果的だと思う。
 - ・専科の教員が配置できる。
 - ・言語の学習は繰り返しの学習、即ち使う機会が多い方がよい場合があるので、小学校で、英語が科目となれば英語を使う

- 機会が多くなりよい。
- ・中学校、高校、大学での英語の力がさらに向上する。
 - ・総合的学習という名前で、中途半端な活動をするくらいなら科目としてしっかり行うべき。
 - ・日本語で考える頭が出来てしまっている中学校の段階より、小学校の方がよい。
- b) の理由
- ・小学校では「何語を話すか」よりも「何を話すか」という国語教育に重点をおくべき。
 - ・小学校時代の目的は、あくまでも興味付け。
 - ・科目にすると評価がからんでくるので、今のように純粋に楽しめる英語をやるためには、科目にしない方がよい。
- c) の理由
- ・科目として英語を教えると、早い段階から英語嫌いを作ることになってしまう。
 - ・今の小学校の教員が英語を教えることは難しい。
 - ・科目として授業を行う環境を整えることは難しい。
 - ・母語の習熟に影響を与える場合、プログラムが一貫性に欠けるような場合は好ましくない。
 - ・どの程度子どもに習得させたいかによる。
 - ・小学生の時期、特に低学年は日本語学習が第一である。
 - ・小中間で、学習内容についての交流をしなければ小学校での英語活動は、効果的でない。
6. どの程度まで、小学校で英語をやってきてほしいか
教員の考える理想的な案としては、以下が挙げられた。
- ・日常の簡単な挨拶、感謝の挨拶
 - ・身のまわりのものを英語で言う(色、曜日、数字、スポーツ、食べ物)
 - ・自己紹介
 - ・異文化についての簡単な知識、関心、興味をつける
 - ・コミュニケーションをとろうとする態度を身に付ける
 - ・外国人に対する正しい理解と対応の仕方
 - ・「英語はこんなに楽しいんだ」という感覚を養う
 - ・英語の歌
 - ・身体と耳、口をフルに使ったゲーム
 - ・ローマ字の読み書き
 - ・アルファベットの大文字、小文字の読み書き
 - ・中学一年生レベル
 - ・三単元のs
 - ・語彙力をつける
 - ・疑問文の形に慣れさせる学習
 - ・教室内英語が理解できる程度
 - ・小中間のカリキュラムに一貫性を持たせた上で、その決められたカリキュラムに従う程度
 - ・英語に慣れ親しむ程度

- ・正しい発音，アクセントに耳を慣らす
ここでよく見られた意見には，以下のようなものがあった。
- ・小中が連携して，指導計画をつくるべき。
- ・英語を書く必要はない。
- ・英語に対する抵抗をなくす。
- ・英語嫌いをつくってはいけない。
- ・英語の音を耳になれさせる。

7．何才くらいから外国語に触れるのが良いか。

選択肢	人数
a) 0才から	2
b) 1才から3才まで	1
c) 4才から6才まで	3
d) 7才から8才まで	8
e) 9才から10才まで	6
f) 11才から12才まで	0
g) 何才かははっきり分らないが早くから	4



4．4 中学校英語の指導者に対するアンケートに関する考察

2(2)の，中学校英語で重視すべき技能についての質問と，前節で見た，小学校英語の指導者が考える重視すべき点を比較すると，両者とも話す・聞くといった 実践的コミュニケーション能力について重視していることがわかる。しかし一方で，小学校では読む・書くといった技能育成はほとんど重視されていなかったが，中学校では読むこと・文法が，話す・聞くに迫る重要性を要しているという結果であった。中学校では四技能がバランス良く習得されることが望ましいので，この結果は至極当然である。しかし，いつも気になるのは，小学校・中学校問わずどこでも，日本では英語を「話す」ことがいつも英語を「聴く」ことより重視される傾向があることである。浅野（1980）が言うように，話すことの基礎は聴くことである。また，言語習得の順序を見ても，聴くことが話すことに先行していることは動かしようのない事実であるので，指導者は「聴くこと」を重視するという意識を，もっと持つべきであろうと思われる。

3の，小学校に英語活動が導入されたことに関する是非についての質問では，賛成が24名中17名(71%)と多数派となった。

また，アンケート6の，教科として小学校で英語を行った方が いいか，という質問に対しても，行った方がいいが24名中13名（54%）と半数を越えた。これらの結果からは，小学校から英語を行うことに対して，積極的に支持するという傾向が見て取れる。しかし一方で，評価をしない方が良く，とか，国語教育を重視すべきである，という意見も強く，意識にばらつきも見られる。

また，どの程度まで小学校で英語を身につけて来て欲しいか，という，小学校英語の目標論にかかわる質問に関しては，「挨拶程度」「自己紹介」のような，会話に重きを置いた意見や，「三単現のs」「疑問文の形に慣れさせる程度」などの，文法的な部分に重きを置いた意見，さらには「英語は楽しいという感覚を養う」「英語に慣れ親しむ」などの，態度的な部分に重きを置いた意見などがあった。このように，小学校で何をどこまでやるべきか，という議論に関しては，中学校の指導者間でもかなりの意見の相違があることがわかる⁶。

前節の小学校英語の指導者に対するアンケートに引き続き，本節では中学校英語の指導者に対するアンケートを実施した。その結果，小学校で英語活動が実施されたことに対して，概ね好意的であるという結果が得られた。その一方で，小学校で何を，どこまでやるべきか，という小学校英語の目標論に関しては，かなり指導者間で揺れがあるという結果が出た。先にも述べたが，この目標論に関する問題は，今後日本の目指すべき英語教育全体の枠組みの中で，しっかり議論されるべき問題である。今後の一貫教育の進展を含め，動向を見守り，できるだけ提言していきたいと思っている。

2．6 幼稚園・保育園の英語指導者に対する調査

早期英語教育の必要性が論じられているのは，無論小学校だけではなく。本章では，小学校英語活動を取り巻く，幼稚園や保育園での英語を使った活動の現状を調査し，早期英語教育の全体像を把握することを目的として，アンケートを実施することにした。本アンケートの調査対象は，岐阜県内の私立幼稚園4校，公立幼稚園2校，私立保育園3校，公立保育園3校，合計12校である。

5．1 アンケートの内容

実施したアンケートの内容は以下の通りである。

- 1．現在，貴園において英語を使って何かやっていますか。
はい・いいえ
- はいとお答えの方に，どのようなことを行っていますか。
具体的にお聞かせください。
- ア) 簡単なあいさつ
- イ) 身近な単語の聞き取り

- ウ) 英語の歌を歌う
エ) その他 ()
- いいえとお答えの方に、今後何か始めようと思われ
ますか。(はい・いいえ)
- また、なぜ現在、英語を使った活動をされていないの
ですか。
2. 現在行われている活動は、どのような教え方をされて
いますか。(該当するもの全てに○をお付けください)
- ア) 文字を使用している
イ) 音声のみ
ウ) 絵を見せる
エ) 何も使わない
オ) 市販の教材を使用している
カ) 独自の教材を使用している
キ) その他 ()
3. 英語を教える際に、誰が指導をされていますか。(複数
回答可)
- ア) 幼稚園教諭・保育士
イ) 常勤の外国人の先生
ウ) 非常勤講師(日本人・外国人)
エ) 近くにお住まいで英語ができる方のボランティア
オ) その他 ()
4. 通常、英語を教える際に、何人で指導されていますか。
人
5. 何歳児からを対象に英語を使った活動をしていますか。
歳児
6. 一度に教える園児の人数は通常何人ですか。人
7. 一度の活動時間は通常どれくらいですか。(時間・分)
8. 英語を使った活動は、どれくらいの定期で行われていま
すか。(年齢ごとに違う場合は、年齢ごとの活動時間をお
書きください。)
- ()月・週に()回
年間()時間程度
9. 貴園で英語を使った活動をしようと思われた最大の理由
は何ですか。
- ア) 小学校で英語活動が始まったため
イ) 早い時期から英語を学ぶ必要があると思ったため
ウ) 親御さんからの要望があったため
エ) その他 ()
10. 英語を使った活動の目標は何ですか。
- ア) 簡単なあいさつができる
イ) 簡単な自己紹介ができる
ウ) 身近なものの名前を英語で言うことができる
エ) 英語に親しみさえすればよい
オ) その他 ()

11. 英語を使った活動で、子どもたちが興味を示した活動は
ありましたか。具体的に教えてください。
12. 英語を使った活動を行う上で、何か問題点はありまし
たか。(指導者・園児・教え方等の問題)
13. 英語に早い時期から親しむことが必要だと思われま
すか。(はい・いいえ)
- また、それはなぜだと思われませんか。はい・いいえと答
えられた方両方とも、その理由をお答えください。
14. 英語は何歳くらいから学びはじめるとよいと思われま
すか。歳位
15. 今後英語を使った活動を増やしていく必要があると思
われますか。

5. 2 結果

主な結果は以下の通りである。

1. 幼稚園・保育園における英語活動の有無

- ・行っている7園 (私立幼稚園4園、公立保育園1園、私立
保育園2園)
- ・行っていない5園 (公立幼稚園2園、公立保育所2園、私立
保育園1園)

選択肢	回答数
ア) 簡単なあいさつ	4
イ) 身近な単語の聞き取り	3
ウ) 英語の歌を歌う	4
エ) その他	5

その他の回答。

- ・英会話の塾から外国人講師を招き、英会話教室を開催してい
る。(3園)
- ・ゲーム遊びを取り入れている。(1園)
- ・体を使った遊びや外国の行事を体験する。(1園)

英語を使った活動を行っていない理由

- ・公立保育所であるから、一園だけとびぬけてできない
- ・幼児期はもっと自然とふれあい、友達と遊んだり体を使って
遊ぶことを大切にしたい
- ・幼児期は体験学習を大いにさせたい

2. 英語を教える際の方法

選択肢	回答数
ア) 文字を使用している	4
イ) 音声のみ	2
ウ) 絵を見せる	6
エ) 何も見せない	0
オ) 市販の教材を使用している	1
カ) 独自の教材を使用している	6

小学校英語活動とその周辺*

3．英語の指導者

選択肢	回答数
ア) 幼稚園教諭・保育士	0
イ) 常勤の外国人の先生	0
ウ) 非常勤講師(日本人・外国人)	(3・6)
エ) 近くにお住まいで英語ができるボランティア	0

・非常勤講師は、英会話の塾の講師や自治体の ALT である。

4．通常の活動における指導者の人数

・ 3 人(非常勤講師 1 人, 補助 2 人)
・ 2 人(非常勤講師 1 人, 補助 1 人)
・ 2 人(非常勤講師 2 人)
・ 1 人(非常勤講師 1 人)

5．通常の活動における園児の対象

	園数
・ 5 歳児から	1
・ 4 歳児から	5
・ 3 歳児から	1

6．一度に教える園児の人数

25～30人(英語を使った活動を行っている 6 園全てが一度に 30人前後教えている。)

7．通常の活動時間

	園数
1 時間	1
・ 30分程度	5
・ 15分	1

8．通常の活動間隔

	園数
・ 週に 1 回	3
・ 月に 2 回	2
・ 月に 1 回	1
・ その他 ¹	1

9．活動を行う理由

選択肢	回答数
ア) 小学校で英語活動が始まったため	0
イ) 早期から英語を学ぶ必要があると思ったため	3
ウ) 親御さんからの要望があったため	1
エ) その他	3

その他、以下のような答えがあった。
・外国の人、外国の文化に興味を持ち仲良くする。

・教育委員会からの要望、特色ある園づくりのため。

10．活動の目標

選択肢	回答数
ア) 簡単なあいさつができる	1
イ) 簡単な自己紹介ができる	0
ウ) 身近なものの名前を英語でいうことができる	0
エ) 英語に親しみさえすればよい	5
オ) 設定していない	0
カ) その他	2

その他、以下のような答えがあった。
・英語による指示を理解し、行動できる。
・英語を使ってゲームや歌を楽しめる。
・小学校で導入されたので、授業に入りやすくするため。
11．子どもたちが興味を示した活動
・言われた単語の絵カードを見つける。カルタ取りの要領で行うカードゲーム。
・英語の歌を歌う。(London Bridge, Head shoulders knees and toes, ABC の歌など)
・ゲーム(フルーツバスケット, どろぼうゲーム, スパイダーゲームなど(詳細な内容は不明))
・ハロウィンの時、帽子やマントを身につけ喜んで参加していた。

12．英語を使った活動を行う上での問題点

・一度に活動する園児の人数が多い。少人数の方が、園児に落ち着きがあったり、指導者が園児の理解度をより良く判断できる。
・初めての時、担任とは違う講師に少し戸惑いがあった。
・どうしても騒がしくなってしまう、落ち着きがなかった。

13．早期に英語を親しむ必要があると考えるか

	人数
・ はい	9
・ いいえ	0
・ どちらともいえない	1
・ 無回答	2

早期に英語を親しむ必要があると考える理由

・外国人に対する偏見、抵抗感を払拭するため。
・遊びの中に英語を取り入れているので、英語に対して違和感や嫌悪感を抱かせることがないため。
・学習という観点ではなく、歌やゲームで楽しく遊ぶ機会があることが有効であるため。
・幼児の特質として、未知のものに対して新鮮な気持ちをもって接することができる。また、英語に対して身構えやためらいがなく、素直に英語の世界に入っていくことができるため。

- ・国際社会において英語は公用語として使用されている。そのため早期から自国語と同時進行で親しむと良いため。
- ・早期に英語に親しむと特に英語の発音能力が高くなるため。

14. 英語を学び始める年齢

	人数
3 歳位	4
4 歳位	3
5 歳位	1
10歳位	1
何歳からでも良い	1
無回答	2

15. 今後英語の活動を増やしていく必要があるか

選択肢	人数
はい	3
いいえ	7
無回答	2

必要であると考え理由

- ・異文化に触れるため。
- ・国際社会といわれる現在、これから必要になってくると思われるため
- ・言葉は使用しないと忘れる。使用する機会を多く持ち、第二言語として自由に英語を使える必要があると思うため。

必要ではないと考える理由

- ・現状で十分。
- ・通常の活動を増やす必要はないが、英語を使った活動意外でも ALT と遊んだり生活できる環境が作ればよい。

5. 3 幼稚園・保育園の英語指導者に対する調査からの考察

アンケート質問 1 の結果から分かるように、英語を使った活動を行っている園は12園中7園であり、その内分けは私立幼稚園が4園、公立保育園が1園、私立保育園が2園である。一方、英語を使った活動をしていない園は5園あり、内分けは公立幼稚園2園、公立保育所2園、私立保育園1園である。活動を行っていない理由として、公立保育所であるため、他保育所と活動内容が大きく異なるとはいけないという意見や、幼児期は自然と触れ合い体験学習や友達と遊ぶこと、体を動かして遊ぶことに重点をおくという理由が挙げられた。

1 に対する回答から分かるように、幼稚園や保育園では簡単なあいさつや英語の歌を歌う活動が主な活動になっていると考えられる。さらに、11の結果より、どの園においてもゲームや体を使った遊びを活動の中に採り入れていることがわかり、幼児が英語と楽しく触れ合うことを重視していることがうかがえる。

13の回答から分かるように、12人中9人が英語を早期に親しむことが必要であると考えている。その理由として、英語を学習という観点ではなく、歌やゲームなどの遊びの中で親しむことができることが挙げられている。また英語に対して嫌悪感を抱かせることがないため、抵抗を感じることなく英語の世界に入っていくことができることも早期に英語に接する理由とされている。更に早期に英語に親しむことで英語の発音能力が高くなることに期待する回答も見られた。現在、英語の活動を行っていない園の回答者の中にも、早期に英語に親しむ必要があると考えている回答があった。

14の英語を学び始める年齢についての問いに対し、12人中9人が幼児期から始めるのが良いという回答であった。10歳位が良いとする回答者の理由としては、英語は日本語を自由に操ることができるようになってから、という考えがあるようだ。

これからの活動時間について尋ねた質問15の結果より、すでに英語を使った活動が週1回程度で行われており、1回の活動時間で十分でなので今後時間数を増やす必要はないと考えているという園もあった。また、英語活動をしていても1回の活動時間が15分程度であったり、異文化理解を深めるため、更に活動時間を増やす予定である園もあった。公立の幼稚園や保育園では、各自治体の方針とも関わってくるため、独自に活動方針の変更を行うのは難しいようである。

誰が教えるか、という質問に関しては、すべてが園外からの非常勤講師が教えているという答えであった。小学校同様、教える人を確保するという問題がありそうである。

質問2の教え方については、文字を使っていると答えたのが4園であったのに対し、音声のみで教えている園は2園にとどまった。文字をどのように用いているかという詳細はわからないが、少なくとも幼稚園・保育園の段階から、文字導入の問題を考える必要がありそうである。

園で英語を行う理由としては、小学校英語活動が開始されたから、という答えは0であった。しかし、質問9の活動を行う目標の中では、小学校で英語活動が開始されたのでそれに入りやすいようにする、ということも目標の一つとして挙げられた。多少ではあるが、小学校で英語活動が開始されたことに伴う、意識の変化がうかがえる。

以上のように、本節では小学校入学以前にスポットを当て、その実情を把握するためのアンケートを実施した。その結果、相当数の幼稚園・保育園で、英語の活動が行なわれていることが判明した。早期英語教育について考える際、今後は小学校以前についても考慮する必要がありそうである。

6. 結語

2章の小学校における英語活動の現状を見てみると、行政側からの適切な指導・研修などが十分に行われていないことがう

かがえた。特にそれが感じられたのは、C・1の「小学校で英語活動を始めるにあたり、自治体で何らかの取り組みがあったか」という質問に対する回答であった。全体的に「何かあったが、それが役に立ったかどうかはわからない」というのが回答の全体的なイメージのように感じられた。平成14年度に新しく導入されたのは英語だけではない。その他の総合学習に関すること、絶対評価に関することなどがそうである。こんな状況なので、現場の教員は正直大変である。しっかり英語に取り組む時間が足りない教員が少なからずいるのであれば、それをサポートする体制を作ることが急務となる。各学校、各教員任せになりすぎないように、まず行政が動かなければならないのではないだろうか。

現在、最も問題となっているのは、こうした英語指導者の不足（数・力量を含め）であり、それを補うための日本人の英語指導者研修システム、養成システムの欠如である。研究者の助言を仰ぎつつ自治体ベースの懇切丁寧な研修を実施するのは勿論、不足している英語講師を民間から登用するシステムを研修制度と結びつけることも必要となろう。この小学校で英語を「誰が教えるか」という問題を、官学そして、民の協働で解決することが、最も切迫した今日の急務である。

また、アンケート全般を通して、小学校英語で何をどこまでやるのか、という目標明らかにする必要性が感じられた。この小学校英語の目標設定という問題については、小学校だけの問題ではなく、幼稚園・保育園から始まり、そして中学、高校、大学へと続く日本の英語教育システム全体の中で見極めて行く必要がある。しかし、それが見極められるのをただ待っているだけではなく、各自治体に根ざした目標、たとえば「小学校を卒業したら自分の町のことを簡単な英語で説明できるようになる」などの目標を掲げ⁷、むしろ日本の英語教育システム変革に対して、何らかの提言ができるような取り組みができることが望ましいように思われる。

この、小学校英語で「何を・どうやって教えるか」という問題は、「誰が教えるか」という問題と並び、今日の最重要課題である。現場の意見を尊重しつつも、学識者の助言を仰ぎ、また時には民間の力も借りながら、目の前のみならず、中・長期の展望の上に立った、各自治体として今小学校で学ぶ子どもたちのためにできる、最善の方法を考えていく必要があるのではないだろうか。

5章より、小学校英語にとどまらず、英語熱はどんどん若年化し、極端な話では胎教にまで英語を採り入れようとしている動きさえある。先にも述べたが、そんな時世であるから、当然幼稚園・保育園でも英語を採り入れるところが見受けられるようになっている。今後は、小学校からの英語活動のみならず、幼稚園・保育園も視野に入れる必要があることがわかる。

本稿では、小学校英語活動と、その周辺である幼稚園・保育園

園、中学校関係者に対する広範なアンケート調査を行った。その結果、現在の課題を以下のように捉えることができた。

日本の英語教育システム全体の中で小学校英語活動を位置付け、目標設定をした上で、「誰が」「何を」「どうやって」教えるか、という問題を、官学民の協働で解決できるようにする

今後はさらにデータを収集しながら、この課題解決に向けて努力しなければならないと考える。

註

* 本稿を執筆するにあたり、平成14年度著者のゼミ所属であった12名、特に大橋美香、岡田幸子、川合則子、桑下真理子、田内裕佳（50音順、敬称略）の協力を得た。この場を借り、深く感謝の意を表する。

1．実際に導入した語は以下の通りである。

身に付けるもの・身体部位（shoes, cap, gloves, pants, sleeveless, ear, eye, tooth, lips, nose, eyebrow, cheek, tin, forehead, muffler, belt, pocket, button, mole, neck）、動物（pig, bear, deer, monkey, squirrel, cow, horse, sheep, mouse, snake, bird, giraffe, gorilla, lion, tiger, zebra, elephant, hippo, cat, rabbit）

2．このような形式でアンケートを行うと、たとえば間違っ覚えていた語があっても、知っている、に○をつけてしまう生徒がいる可能性がある。しかしここでは、生徒の「どこかでその語を教わってそれを英語で何と言うか知っている」という感覚を大事にすることとし、このような形式でアンケートを執行することとした。

3．平成15年度、著者と本学ランダル・コットン氏で実施した公開講座「子どもに英語を教えたい人のための勉強会」には38名の受講者があり、その大半が家庭で英語を教えたいと考えている方々であった。このように、英語を家庭で教えたいという意識が高いことを鑑みると、家で父母が英語を子どもに自信を持って教えられための講座などを設けることによって、今後家庭の英語教育力があがる可能性が十分あると思われる。また、むしろ崩壊の危機に瀕している家庭の教育力を、英語で救う、ということも不可能ではないと考える。

4．文部科学省によると、小学校英語活動の実施状況は、平成13年度では9396校（41.8%）、平成14年度では全国22847校中、小3で11724校（51.3%）、小4で11957校（52.3%）、小5で12327校（53.6%）、小6で12806校（56.1%）である。また小学校6年生が1年間に受けている英語の時間数は1～11時間が63.0%、12～22時間が23.2%、23～35時間が11.8%、26～70時間が1.7%。71時間以上が0.2%で、平均すると年間8時間程度である。また、非公式であるが平成15年度には前年より全体で約10%

近く英語活動実施校が増えたと言われている。

5. 実際どのような形で文字が導入され、活用されているかという詳細な点については、追跡調査の必要がある。また、音声中心の小学校英語における文字を導入の効果についての議論も理論を踏まえて検証する必要がある。この点については中村(2003)などを参照のこと。

6. 言語材料等の中で、小・中学校英語の指導者が小学校で採り上げた方が良いと思う項目と、採り上げる必要がないと思う項目を調査した。全48項目のうち、小学校英語の指導者が小学校で採り上げたほうが良いと答えた項目の平均は41%(19.7項目に相当)であったのに対し、中学校英語の指導者は32%(15.4項目に相当)であった。一方、小学校の指導者が小学校で採り上げる必要がないと答えた項目の平均は34%(16.3項目に相当)であったのに対し、中学校英語の指導者は68%(32.6項目に相当)であった。つまり、小学校英語の指導者の方が、小学校でより多くの項目を扱いたいと思っている傾向があり、一方で中学校教員は、小学校ではあまり多くのことをやる必要がないと考えていることがわかる。

この意識差は、今後進むと考えられる、小・中一貫教育の流れの障害にもなるように思われる。これを顕著に表していると思われる言葉が、某小学校の先生が言われた「中学校の英語の先生は小学校にはいない」という言葉であろう。昨今、小中連携の第一歩として、中学校の英語の教師が小学校へ出向するという機会が増えているようである。しかし、アンケート結果から明らかなように、小中の先生方には小学校英語が目指すべきゴールに関する温度差がある。今後小中一貫教育を推し進めるのであれば、教員の移動等のハードの問題だけではなく、移動する教員の意識、何をどのように小学校では教えるべきか、などのソフトの問題についてもっと真剣に考える必要がありそうである。

7. 「小学校を卒業したら自分の町のことを簡単な英語で説明できるようになる」という目標は、非常に理にかなった目標であるように思われる。小学校における英語活動は、総合的学習の中の国際理解教育の一環であるが、国際理解の第一歩はまず自らの地域を理解し、それを他の地域と比較することにある。この自分の生まれ育った日本、そしてある県のある地域のことを知るという「核」(以下、コア)をなくして、国際理解は成立しないと考える。たとえば著者は福岡県筑豊地方の出身であり20歳までそこで過ごし、それから大学に通うため違う土地(茨城県つくば市)に移り住んだ。そしてそこで今まで自分が生まれ育った土地の文化と違う土地の文化を比べることができて初めて、それまで「当たり前だと思っていた」自分の生まれ育った文化の特色、考え方の傾向の良し悪しなどを知ることができた。この「当たり前と思っている」部分、つまり「コア」の部分と異文化を比べられる状況を抜きにして、異文化コミュニ

ケーションは成立しない。言い換えれば、異文化を異文化と認識できる日本のコアを抜きにして、国際理解教育も何もないのではないかと考えるのである。現代日本ではこのコアが喪失していると述べているのが、Cotten・中村(2001)である。以下その一部を抜粋する。

「現在日本では、異文化、特に西洋的なものを、盲目的に受け入れる傾向があるように思えます。ふと気づいてみると、日本的なもの、つまり「郷に入れば郷に従え」の「郷」とは、現代日本においていったい何なのかということを、考えさせられる状況になってしまっているような気がします。もちろん、これまでの日本文化も日本内だけの純粋培養だったわけではなく、様々な異文化の影響を受け、徐々にその形を変えて来たのは事実です。しかし、現在の異文化流入は、これまでになく暴力的に、日本文化を急激に歪(いびつ)なものへと変えてしまおうとしているように思えてなりません。極言すれば、我々日本人が日本人たる拠り所が、いつの間にか剥奪されてしまっているような気がします。」

このように、自分の町のことを外国人に伝えようとすることで、自らの足元を見極め、コアを形成されることを促すのではないと思われる。

また観点を変えても、外国人と話す際に、我々が疑問詞を並べて通り一辺倒なこと、たとえば年齢や出身地を尋ねることができても、それに続く相手からの質問に応えられなければ、コミュニケーションにならない。外国人にとっても、会話から日本のことを色々と学べてこそ、コミュニケーションの喜びがあると思われる。そういう意味で、小学校においても、受信型ではない、発信を主とした活動を行うことが望ましいと考える。

References

- 浅野博(1980),「In defense of language laboratory」『外国語教育論集』vol.1 筑波大学外国語センター。
- 石坂和夫(1993),『国際理解教育事典』創友社。
- 川端末人・多田孝志(1990),『世界に子どもをひらく』創友社。
- 小池生夫(監修)(1994),『第二言語習得研究に基づく最新の英語教育』大修館。
- Krashen, S.(1973),“Laterlization, Language Learning, and Critical Period,” *Language Learning*, vol. 23, 63-74.
- Krashen, S.(1985) *The Input Hypothesis: Issues and Implications*. Longman.
- 文部省(1999),『小学校学習指導要領解説総則編』東京書籍。
- 文部科学省(2001),『小学校英語活動実践の手引き』開隆堂。
- 中村典生(2001a),「早期英語教育への提言」『岐阜市立女子短期大学研究紀要』vol.50 37-46。
- 中村典生(2001b),「早期英語教育の課題と展望」『言語文化学会論集』vol.16 63-72。

- 中村典生 (2002a), 「公立小学校における英語教育の目標」『岐阜市立女子短期大学研究紀要』vol. 51, 73-80.
- 中村典生 (2002b), 「小学校における英語活動導入の実態」『言語文化学会論集』219-229.
- 中村典生 (2002c), 「早期英語教育の指導方針—アルファベットを用いない教材の開発は必要か」『ことば考』ことばを考える会 proceedings vol. 1・2 合併号, 3-12.
- 中村典生 (2002d), 「公立小学校英語活動導入を目前にして」『ことば考』ことばを考える会 proceedings vol. 1・2 合併号, 32-42.
- 中村典生 (2003), 「小学校英語活動における語彙獲得に関する一考察」『言語文化学会論集』vol. 21, 63-74.
- 西中隆 (1996), 『公立小学校における国際理解・英語学習』明治図書.
- Randall Cotten・中村典生 (2001), 「郷に入れば郷に従えを考える」『岐阜の人権2001』64-69.
- 田崎清忠 (編) (1995), 『現代英語教授法総覧』大修館.
- 安井稔 (2000), 「早期英語教育に思う」『大塚フォーラム』vol. 18, 2-15.

(提出期日 平成15年12月10日)